

書 評

石野 哲・水谷昌義・高山弘志・浅野明彦 共編：
『停車場変遷大事典 国鉄・JR編 1・II』

JTB 1998年10月 B5判 798頁 (I) +990
頁 (II) 12,000円 (本体)

鉄道線や駅の開業年月日は鉄道の歴史にかかわる重要なデータであり、一つの地域社会の地理・歴史を調べる場合でも基本的な調査項目といえよう。しかし、これまでの地方史・誌の類をひもとくと、これに関する記述の正しくない事例が極めて多いのは残念なことである。それは典拠とする原資料が孫引きを重ねたいいかげんな通俗史である場合がしばしばあるからで、一般に地理学者や歴史家は鉄道史研究法に関する訓練をまったく経験していないことに由来する。評者は長年にわたって「一般の地方史や地誌類に書かれた鉄道に関する記述は絶対にそのまま鵜呑みにしたり、引用してはならず、必ず信頼できる資料によってチェックしなければならない」と学生に言いつづけてきた。もっとも基本的なデータで調査も比較的簡単な開業年月日ですらしばしば間違えるのであるから、他の事項にいたっては推して知るべし、と言っても決して言いすぎだとは思わない。

しかし、その「信頼できる資料」というのを見つけるのがなかなか難しかったのである。

鉄道線や駅の開業年月日を調べるもっとも基本的な手順は次のようになるであろう。

まず、国鉄については、1907 (明治40) 年4月1日以降刊行されてきた『鉄道公報』(一時的に名称が異なった時期もある)が刊本としてはもっとも基本的な資料であり、民鉄については、統一された刊本はなく、各民鉄ごとに免許・認可・諸届の原文書を綴った『鉄道省文書』によることになる(ただし、内容がよく整理されているのはやはり1907年頃以降である)。1907年以前にあっては『官報』によらねばならない。しかし、これらの基本文書を直接に参照することを鉄道史の専門家ではない一般の研究者に要求することは無理であって、やはり編纂されたデータベース的な資料で、信頼性の高いものによるのが妥当なところであろう。

もう少し簡単に見られる資料としては、『鉄道停車場一覧』がある。これは国鉄の駅全部と民鉄駅のうちで国鉄と連帯運輸を行っている駅につい

である特定の時点現在で一覧表としたものであり、駅名、駅間距離、所在地、開業年月日が記載されている。この資料は数年ないし十数年ごとに刊行されていて、便利な資料であるが、版を重ねているうちに誤植が発生し、直されないままに後年の版に引き継がれるため、時には誤った年月日の記載が往々にして見られるから注意が必要である。とはいうものの、一般の地方史や地誌類の執筆にあたって、駅の開業年月日を調べる場合に『鉄道停車場一覧』を用いる地理・歴史学者がいたならば、一応慎重さの点では合格としてもよいであろう。評者も簡単な調査においてはこの資料(ただしなるべく開業年よりも年月の経過が少ない年次のものを使用するように努めている)をしばしば使ってきた。ただし、長年調査に当たってきた経験で、おかしなところがあるとなにかひっかかるものがあって、別の方法でクロスチェックするようにしているが、もちろんこんなカンに頼るような方法を他の人々に薦めるわけにはゆかない。たかが駅の開業年月日といっても、厳密に調べるとなると案外に難しいものなのである。

1960年代後半以降、鉄道史研究の急速な発展とともに、この種のデータベース的な資料の整備も少しづつ進められてきた。

たとえば、上記の『鉄道停車場一覧』のうち、過去の版については、「明治45 (1912) 年5月1日現在」、「昭和12 (1937) 年3月31日現在」、「昭和21 (1946) 年10月1日現在」の3種については、鉄道史資料保存会(大阪市天王寺区)によって、それぞれ1987, 1986, 1988各年に復刻されている。

一方、鉄道線区の開業年月日については、駅の開業よりは容易であるが、統一的なデータベースの役割を果たすものとしては、『増補改訂 鉄道略年表』(日本国有鉄道編, 1963)あたりが最初といえよう。「あたり」と書いたのは、この本は「増補改訂」という文字を冠していることから明らかかなように、その前作があって、1961年にもっと簡単な『鉄道略年表』がつくられているからである。この本は日本国有鉄道が鉄道開業100周年を期して『日本国有鉄道百年史』を刊行することになり、修史課が設置されて、その基礎資料としてつくられたもので部内頒布の本であった。『増補改訂 鉄道略年表』ももともとは前作同様に部

内頒布資料（1962年刊）であったが、翌年に翻刻の形式で日本鉄道図書から定価を付して一般発売されたという経緯があった。ここには1962年3月31日までの年表が収録されたが、索引によって、国鉄関連（国有化された私鉄を含む）の線区別開業年月日を容易に検索できるようになっていた。

【増補改訂 鉄道略年表】は暫定的、中間的なもので、1972年、『日本国有鉄道百年史』の完成とともに、その一環として『日本国有鉄道百年史年表』が刊行された。ここでも索引のなかに「新線開通」と言う項目があり、線区別の開業を記したページ数が示されていて、1972年10月14日までの事実が検索できた。

本書には付録として「新旧線名対照表」、「駅名改称一覧」があり、途中で改称された駅について、1972年9月末現在の駅名を基準としてあいうえお順に配列し、その旧称と改称された年月日を記載している。国鉄関連駅の改称が一括してリストアップされたのはこれが最初であり、『鉄道公報』から拾い出した確度の高いものとしてたいへん貴重な資料となった。しかし、この段階ではまだ完全なものではなかったのである。

私鉄を含めた日本の鉄道全線区の開業年月日を始めて統一的に収録したのは、『鉄道百年略史』（電気車研究会、1972年刊）であった。この本は、和久田康雄氏が中心となって、赤門鐵路クラブ（東京大学鉄道研究会 OB の会）の有志メンバーが調査・編集にあたった。内容の約半分を「路線編」とし、国鉄・私鉄の全路線の開業・廃止・改軌・電化・線増（複線化・複々線化など、国鉄のみ）・経営主体の変動（会社の合併・改称など、私鉄のみ）を網羅した年表で、国鉄については『鉄道公報』から、私鉄については『私鉄統計年報』（当時の名称、現在は国鉄の後身である JR を含んで『鉄道統計年報』と称する）とその前身となる鉄道年報類からそれぞれ直接に調査がなされた。1972年7月末日までが収録された。本書では、ページ見開きの左側（偶数ページ）に年表を、右側（奇数ページ）に対応年次に起きた鉄道に関する主要な歴史的諸事実を簡単に解説するスペースに当てていた。索引は国鉄では線区名称、私鉄では鉄道企業名ごとに開業・廃止などの年次が記載されていて、詳しくはそれぞれの年次のページを参照するようになっていて、検索には若干めんどうであった。これはページ数の節約を図ったための措置と思われる。

代表者の和久田康雄氏は、すでに1968年に『資料・日本の私鉄』（鉄道図書刊行会）を刊行し、開業したすべての私鉄について最初の開業年月日と廃止・合併などの年次、最終的な営業区間とキロ数、保有車両数などのリストを明らかにしていた。しかし、個々の区間の開業年月日は収録されていなかった。同書はその後にも改訂を続け、『新版資料・日本の私鉄』（1972年刊）、『改訂新版資料・日本の私鉄』（1976年刊）となったが、1993年に全面的に書き直され、『私鉄史ハンドブック』（電気車研究会＝鉄道図書刊行会と同一企業、1993年刊）として刊行された。この本では各私鉄ごとにすべての区間の開業年月日が収録された。

日本の鉄道百年を記念して1972年に刊行された一連のデータベース的な資料に続いて、1972年以後、1993年4月末日までの諸事実を年表としてまとめたものとしては、池田光雅氏による『鉄道総合年表1972-93』（中央書院、1993年刊）がある。この本では路線の開業年月日に関しては、「国鉄（JR）路線別索引」、「私鉄その他事業体別索引」によって知ることができる。

電化、複線化の年月日についても、上記の『日本国有鉄道百年史年表』『鉄道総合年表1972-93』でも検索することができる。

このように、鉄道路線や駅の開業年月日、とくに前者については、すでにこれまでにかなりのデータベース的な編纂資料が公開されているが、地理学・歴史学の世界ではまだ十分にその有用性が認識され、利用されているとはいえない。同時にこれらのデータベースは膨大な数字の羅列を基本としたものであるだけに、常に誤植や脱落が起こる可能性と高い確率で直面しており、評者の所有し、日常的に利用しているこれらの諸資料には誤植訂正や追加記入の書きこみが多数なされている。たかが開業年月日とはいっても、完璧なものをつくるのはなかなか難しいことなのである。

前置きがいささか長くなったが、ここに取り上げた『停車場変遷大事典 国鉄・JR編』は、その範囲を国鉄・JRに限定して（ただし、国有化された私鉄と国鉄線から転換された第三セクター鉄道は含まれている）、一般の私鉄は除外されているというものの、これまでに公開された鉄道路線・駅の開業年月日のデータベースのなかでは極めて完成度の高いものである。

本書の取り扱うのは「停車場」である。本稿ではこれまで駅という通称を用いてきたが、正しく

は、駅、信号場、操車場を総称して停車場と呼ぶ。駅は旅客や貨物を取り扱う営業施設であり、信号場は列車の行き違い、待ち合わせのための施設、操車場は車両の入換え、列車組成のための施設である。

本書はI・II巻より成り、次のような構成になっている。

I巻 序

総目次

創業126年、いま解明される停車場の軌跡
(原田勝正)

はじめに

本書を使うにあたって

停車場の調べ方—告示・公示と達

凡例

鉄道史資料編

参考文献

線名の移りかわり

線路名称 大区分(部)の系図

線路名称 告示の初め

線路名称 大区分(部)の系統表

線路名称 小区分(線)の系統表

線路名称 区間表示の移りかわり

国鉄再建法施行令の区分表示

距離の移りかわり

線区ごと 距離の推移

日付順 距離の累計の推移

駅間距離の新旧対照表

第三セクター鉄道一覧

駅名の移りかわり—1

日付順 駅名の移りかわり

訂正表

索引

駅名 あいうえお順索引

線名 あいうえお順索引

六曜・七曜表(1868~1872年)

II巻

駅名の移りかわり—2

あいうえお順 線名索引

駅名の移りかわり

凡例

線路名称順 駅名の移りかわり

時刻表に見る国鉄時代の臨時駅

全国廃線鉄道地図

あとがき

原田勝正氏の序文は、歴史学や地理学の研究における停車場研究の意義と本書の有効性に触れたもので、通り一遍の序文ではなく、本書の持つ価値の認識には一読に値する文章といえる。

「はじめに」の内容は、停車場の歴史を理解するにあたっての基礎教養といってよい。駅を特定する3要素として、駅名、所属線路名称、起点駅ないし隣駅からの距離の意義に始まり、『鉄道停車場一覧』の発行年次、停車場調査の基本資料、停車場の定義、現在はない停車場の種類、国有鉄道の組織名の変遷、荷物・貨物運輸制度の変遷、鉄道における使用数値単位表示の変遷、太陰暦・元号・六曜の説明、会計年度区分の変遷、かなづかいと当用漢字などの国語政策年表、参考文献表、『鉄道公報』の所蔵個所など極めて多岐にわたるが、実はこれらの基礎教養は一般の歴史家や地理学者にとってはほとんど知られていないことが多く、本書が極めて広い範囲の人々に利用される想定で編纂されていることを示している。

本書の中心部分を構成しているのは、線名の変化と線区ごとの距離の変化(その大部分は新たな開業と廃止などによるもの)、駅の開業・営業範囲の変更・駅名改称などの年月日をデータベース化した膨大な一覧表である。これらをそれぞれ線区別に(II巻所収)、日付順に(I巻所収)、索引できるように異なる表に構成している。また、駅間距離については、重要ないくつかの時点(1889年7月6日、1902年11月12日、1907年11月1日、1930年4月1日、1987年4年1日、1998年7月31日)について全線全駅の数値が表示される。1907年は17私鉄国有化の完了日、1930年はメートル法への切り替えによるもの、1987年は国鉄の分割・民営化の日、1998年は本書のまとめの最終日である。

国鉄の臨時駅については、本来は各地方局の局報によるべきものであるが、さすがにここまでは手が回らなかつたらしく、JTB発行の時刻表(1949年4月号~1987年3月号)によって調査を行い、「時刻表に見る国鉄時代の臨時駅」としてまとめられている。

巻末に「全国廃線鉄道地図(都道府県別)」があり、国鉄・JR線、私鉄線にかかわる廃止鉄道のすべてが収録されている。

本書は書名にも示されているように、あくまで国鉄・JR線についてのみのデータベースであり、私鉄については国有化されたもの、国鉄再建法が

らみで第三セクター化されたものを除いては収録の範囲外である。『国鉄・JR編』に続く『私鉄編』出版の計画はまだ具体化しておらず、刊行するにしてもまだかなり先のことになりそうである。

本書の刊行について特筆しなくてはならないことは、このような地味で、かつ長期にわたる調査が、鉄道が好きで鉄道の歴史をこつこつと調べつづけてきたアマチュア研究者の人々（鉄道趣味者あるいは鉄道ファンと呼ばれる）によってなされてきたことである。これらの鉄道研究者の研究成果については一般の人々の関心を惹くことは少ないが、鉄道史研究においてはこのような人々の仕事の集積はすでに巨大なものとなっており、その成果を正しく評価し、援用することが今後の歴史学や地理学の研究に必要なことと考えなくてはならない。

また、本書のI巻692ページに訂正表が収録されている。ここではまだ1ページ分でしかないが、評者の手許には、本書編集の代表者格の石野哲氏

よりすでにA4版11枚に及ぶ正誤表が送付されてきている。今後発見される誤りや脱落事項は、NIFTY SERVEの鉄道フォーラム専門館9番線「鉄道歴史談話室」会議室(nifty:FTRAINES/MES/9)でお知らせしてゆくそうであるが、訂正個所の数は決して少ないとはいえない。数字の羅列の多いこの種のデータベースではある程度の誤植や遺漏は避けられないのかもしれないが、膨大な基礎資料からの完全なデータベース作成の難しさをしみじみと感じた。比較的データが集中している国鉄・JR編についてさえこれだけの誤植・遺漏が発生しているのであるから、個々の私鉄ごとに資料を拾ってゆかねばならない私鉄編の作成にはまだまだ時間がかかると考えねばならないであろう。

このような問題はあるものの、この膨大な前人未到のデータベースを完成させた本書の编者たちには深い敬意をささげるものである。

(青木栄一)